

保育現場における幼児の空間的環境との関与に関する研究の整理と検討

中田 範子

本稿は、保育現場における幼児の空間的環境の関与に関するレビュー論文である。対象とした先行研究を「保育の質の向上との関連」「空間環境の特性と子どもの行動との関連」「幼児の視座から捉えた空間環境」に分類し、動向を分析した。

その結果、保育・幼児教育、環境教育、建築学等、様々な分野にわたっていることが特徴的であり、今後の課題が3点挙げられた。第一に、幼児の空間環境との関与を連続的に捉え、その連続性を評価するための指標作成が必要である。第二に、空間環境の特性と幼児の滞留行動を捉えることの有用性を幼児の環境との出会いの偶発性を踏まえて理論化することが求められる。第三に、幼児の視点から空間を捉えることを通して空間の意味や意味化のプロセスを探ることの可能性が期待できる。

キーワード：空間 場 保育 環境 物理的環境

1. 問題と目的

本稿は、研究のフィールドを国公私立の幼稚園、保育所、認定こども園とし、研究対象を幼児（1歳児から就学前の子ども）とした研究のうち、幼児の空間環境との関与に関する先行研究を整理し、その動向と課題について考察するレビュー論文である。

保育分野で論じる場合の「環境」とは、子どもを取り巻くあらゆるものをさす¹⁾。すなわち、遊具や絵本等の物理的環境、園庭や保育室内に設定されたままごとコーナー等の空間環境、木の枝や葉といった自然素材、保育者や園児という人的環境等が含まれ、それらが関連しながら子どもの保育環境を構成している。また、幼稚園教育要領では、第1章総則第1幼稚園教育の基本の冒頭に「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うことを基本とする」と記載されている。ここでいう「幼児期の特性」とは、様々な説明がなされるであろうが、本稿に関連する「幼児期の特性」として、幼児には、能動的に環境に関わり、自ら感じとり、気づき、働きかけるという特性があり、能動的な存在であるという子ども観の下に幼児期の教育・保育が行われていることを念頭に置く。

また、幼児にとっての環境は、ただそこにあるだけでは、「背景」にしかならず、子どもがそこに生活し、遊び、場を共有する保育者や仲間と関わり、あるいはそこに物を介在させて、意味が生成され、「生きられる空間」^{注1)}となる。つまり、幼児が自ら環境に関わり、興味を持ち、場を見立てたり、活用したりすることを通して、子どもにとっての意味のある環境となる。ここに幼児にとっての環境の重要性があり、この「生きられる空間」を通じた教育が行われてこそ「環境を通じた教育」となるのである。また、同

様に、汐見は、「子どもにとっての空間の問題は、その広さやそこにどのようなものがあったかというような物理的な視点だけでは実は保育学的な接近はできない。」と指摘している²⁾。

生態心理学や社会心理学分野では、クルト・レヴィン (Kurt Lewin) やジェームズ・ギブソン (J. Gibson) が、環境と人の行動の関係性について述べている。レヴィンは、場の理論 (field theory) を提唱し^{注2)}、人間の行動を、個人の特性とその人を取り巻く環境との相互作用 (彼は「関数」という表現を用いている) によって説明した。また、ギブソンは、「アフォーダンス理論」^{注3)}を通して、物理的な環境が人間の知覚に与える影響を言及した。「アフォーダンス」とは彼の造語であるが、環境が人に対して与える「意味」や「価値」を示す。その「意味」や「価値」を保育実践の文脈においてみると、環境は、実践の中で子どもや保育者が知覚することで、現実化/実現 (realize) する。つまり、子どもが環境を知覚し、様々な体験をすることで、環境が意味ある存在となる。

山本 (2019)³⁾ は、保育場面である男児が山の木々の中に陽光が差し込み、緑色の葉が白く光っている様子を「雪みたい」とその場にいる保育者に伝えた事例を示しながら、アフォーダンス理論における環境と人との関係を説明した。男児が発見した山の木々の白い葉の存在は、保育者はそれまで「気づいていなかったが、それまでもそこにあった」環境の存在 (reality) である。このような解釈が成り立ち、白い葉の存在も保育実践にとって意味あるものとして扱っていくならば、現在のわが国の「環境を通じた教育」を支える保育環境理論は、「十分ではない」と主張している。

2. 方法

2-1 文献の検索と収集

和文の先行研究は、データベース・サービス NII (国立情報学研究所) 論文情報ナビゲータ「CiNii Articles」を使用して文献検索を行った。その際は、「保育」「環境」「場」というキーワードを用いて検索して文献を収集し、さらにその文献に引用されている論文・著書等、関連する学会の学会誌から論文と総説も収集した。また、英文の先行研究は、「SAGE Journals」と「Research Gate」を使用し、「early childhood」「physical environment」「spatial environment」「ECEC」「setting」「space」「implement」「play」をキーワードに検索して収集し、必要に応じて収集した文献の引用文献と被引用文献を収集した。いずれも、2000年以降に発行されたものを対象としているが、必要に応じて1999年以前の文献も収集した。このような方法で収集した文献のうち、フィールドが保育現場で、かつ幼児で、空間的環境との関与について論じている文献を中心に抽出し、精読した。

2-2 分析

収集した文献のうち、抽出した83本の文献を研究目的や分析の視点から「保育の質の向上に結び付くための空間的環境の構成」「空間的環境の特性と子どもの行動特性との関連」「幼児の視座から捉えた空間的環境」と分類し、その動向を考察した。

3. 結果

3-1 保育の質の向上に結び付くための空間的環境の構成

以下に示す研究は、保育の環境は、保育者が、子どもの興味の対象や意思を読み取り、ねらいに沿って構成していくものであることを前提とした研究である。先述した山本 (2019) のような指摘があるものの、保育環境の空間的構成をどのように変化させたら、どのように子どもが変化して、保育の質向上に結び付くのか、という問いは、保育学分野の研究において、大きな関心事であろう。

1. 研究者と保育実践者の連携の在り方

研究者がどのような立場で保育に関わり、研究対象とどのような関係性にあるのかを着目する必要がある。例えば、研究者が園長という立場でアクションリサーチしている研究^{4,5)}、研究者が保育実践者と連携した共同研究^{6,7,8)}、研究者がフィールドに一定の期間フィールドに入り観察した研究⁹⁾が見られた。これらは、保育者と近い位置から、保育現場の空間的環境の変化に伴う子どもの行動や、保育者の意識の変化を調査したものである。

また、各研究者・保育実践者の得意とする分野による研究目的の相違がある。多くの保育系・建築系の研究者が、保育現場をフィールドとした調査研究しているが、これらの研究について、山田(2011)¹⁰⁾は、「ある設定された空間の中でいかに子どもたちが活動しているかを客観的に捉える建築計画的な視点とある設定された空間の中でいかに豊かな保育を行うかに偏る保育現場の視点に二分されている」と指摘した。そのうえで、園内の絵本コーナーの設置に関するアクションリサーチを通して双方の歩み寄りを試み、具体的な提案を示している。そして、麻生ら(2014)¹¹⁾は、保育者は、子どもに対する願いや保育のねらいはあるものの、その実現のための具体的な手段に辿りつくことが難しいという現状を言及し、保育者が望む子どもの姿等をアンケート調査し、例えば、保育者が「子どもが集中して物事に取り組んでほしい」と望む場合には、小さな空間や区切られた空間の設置を必要とし、そのためには段ボールハウスや小さなソファの設置等の具体的な提案を示しながら、保育者の意識と具体的な環境設定の方法をつなぐことを試みている。

2. 空間的環境の変化と保育の質向上

河邊(2006)は、幼稚園の3,4,5歳児を対象に園内のウッドデッキテラスの活用についてアクションリサーチをした。子どもの行動を観察しながら、ウッドデッキテラスを配置し、形状を変え、子どもの動線を整理して滞留する場を設けることで、子どもが主体的に遊ぶようになったことと、子どもが自ら屋外でも拠点を作るような変化があったこと、その変化とともに、保育者側にも意識の変化が見られ、環境の重要性に気づくようになったことを報告している⁴⁾。他に、滞留する場が子どもの主体的な規範意識の育ちの一助となることを前提とし、レゴコーナーの配置を変化させながら子どもの行動の変化を追った研究¹²⁾も見られた。

また、増田ら(2017)は、保育所の2歳児の保育室に観察者として入り、子どもが滞留できる場を設定し、その後の行動の変化を観察することを繰り返しながら分析した。その結果、子どもが安心感を持てる空間を得ることができたことを示唆した¹³⁾。同様に、保育所の2歳児保育室の子ども動線を整理し、子ども動線に沿ってコーナーを区切ることにより、保育者の援助を求めて周囲に集まる子どもの人数が有意に減少し、保育者の視線や立ち位置に変化が見られたことを示唆した研究もある^{14,15)}。そして、保育者の意識が変化したことにより、保育者の子どもを理解しようとする行為や応答的な関わりが増加したこと⁸⁾を明らかにした。

さらに、乳児保育室を対象にした研究も散見された。保育所の乳児保育室に仕切りやカーペットを設置して場を区切ることによって、子どもの行動が落ち着き、保育者から離れて遊ぶことができるようになり⁴⁾、保育者の援助がより受動的・共感的な援助へと変化した⁸⁾という結果が報告されている。

西本ら(2006)¹⁶⁾は、屋内の遊びのコーナーに着目し、保育者が子ども同士の関係性に依拠して連続したコーナー設定や遊具の量を調整している姿を見出した。また、吉田ら(2005)¹⁷⁾は、保育者が保育内容に応じて保育室内を回遊したり滞留したりすることを通して、子どもの場の構築に寄与しており、単に物理的な場の設置のみならず、保育者の行動が子どもにとっての意味のある場づくりを援助していることを示した。海外の研究でも、空間的環境の変化の保育者への影響を示すものが見られる。T.K.Aslanian(2017)は、ノルウェーの3歳未満の子どもと保育者との養護的な関係が確立していたが、部屋の中心部

にフローリングを新たに敷設し、機能性の高い環境を設定したところ、保育者の養護的な関わりに変化が生じたことを報告している¹⁸⁾。

これらの研究からは、園環境にある子どもの動線を整理し、空間的環境に仕切りを設けて遊びの拠点となる場を設置することにより子どもが滞留し、主体的に遊ぶようになったこと、そして、子どもの遊びが、保育者との関わり中心から、空間的・物理的環境との関わり中心となり、それに伴って保育者の意識や援助方法に変化をもたらした、という構造が見いだされる。このように、園全体あるいは保育室の空間全体を俯瞰して、子どもの行動を観察しながら、「保育の質向上のために子どもが滞留する場をどのように設定するか」を見出す、あるいは検証することが中心である。また、得られた結果から、空間の条件を整えることが保育者の援助・視線・意識に影響を与え、保育の質を保障するという点で、保育環境の重要性が論じられており、保育の質向上のために、「どう空間的環境を構成したら子どもがその場に滞留するのか」に焦点が当てられている研究が多いことが特徴的である。

3. 園内環境を評価する指標

園内の物理的な環境の評価スケールとして知られているのが、アメリカや日本の他、数カ国で、保育者養成や研修の場で広く使用される、「Early Childhood Environment Rating Scale-Revised Edition (ECER-R)」^{注4)}である。これは、テルマ・ハームス (Thelma Harms) とリチャード・クリフォード (Richard Clifford) によって考案された評価スケールで、園内の物理的環境のみならず、保育者の関わり等の人的環境に関する項目も含まれる。

海外の論文を検索すると、「子どもへの物理的環境の影響を直接考慮した研究がほとんどない」¹⁹⁾と指摘されるように、環境の数量的な差（広さや設置されている物の量）や、環境への曝露 (exposure) の時間的な差と子どもの能力的な差の相関を分析しているものが多い。しかし、ECERS-R は、環境の質に着目したスケールである。ECERS-R を用いて、子どもが、言葉や数の問題に取り組むための教材の利用可能性を高めるように保育室内の環境を変化させたところ、子どもの認知的能力の評価結果が向上したという研究がある。しかし、ECERS-R は、欧米諸国以外での文脈で、保育の質を評価する際の適用可能性については、議論があることも指摘している (Aboud, 2006; Moore et al., 2008)^{20, 21)}。このような指摘に対応して、石倉ら (2020)²²⁾ は場を園庭に限定して、園庭の空間的・物理的環境と関わりながら子どもの遊ぶ姿と保育者のねらいと援助方法に焦点を当てたスケールの作成を試みている。

上述のように、環境の変化が保育者の意識や行動の変化をもたらしたという構図に対して、保育者の教育レベルと保育環境の質との関連を報告するものがある。M. Manning ら (2019)²³⁾ は、保育者の取得する資格レベルと保育環境の質との相関を分析したところ、保育者の取得する資格レベルの高さとプログラムの構造や言語や推論といったサブスケールを含む保育環境の質評価の高さに正の相関があることを示した。

3-2 空間的環境の特性と子どもの行動特性との関連

ここでは、「どのような環境の特性がどのように子どもの行動に影響を与えるのか」という点で分析した研究を整理する。

1. 園内の屋外環境に焦点をあてた国内の研究

2018年、幼稚園設備整備指針²⁴⁾が改定され、基本方針の第一として、「自然や人、ものとのふれあいの中での遊びを通じた柔軟な指導が展開できる施設環境の確保」が挙げられている。また、園庭で十分な活動ができない保育所等に対して費用補助の措置がとられ、狭小な園庭、屋上やテラスも園庭（屋外遊技場）として認可されるようになった。このような法的制度の改定に伴い、保育施設には多様な特性

を持つ屋外空間が設置され、遊び環境が多様になりつつある。このような現状を踏まえると、空間的環境の物理的特性が、子どもにどのような影響を与え、どのような行動を促すのかを調査分析することは、有用である。

収集した屋外環境に焦点を当てた国内の研究を整理すると、園庭の全体あるいは特定の場に着目し、子どもの行動を観察調査した研究が中心であるが、分析の着眼点は多様である。例えば、幼児の動作と園庭の環境要素²⁵⁾、子どもの活動時間と園庭の広場や固定遊具の配置²⁶⁾、築山の教育的効果²⁷⁾、砂場での砂遊びの特徴²⁸⁾である。他に、園庭に設置された閉所²⁹⁾、園庭の道スペース³⁰⁾、屋上庭園³¹⁾と、着目する場も多様である。

千田ら(2019)は、砂場や築山に滞留する幼児の動作を観察すると、年齢が上がるにつれて、移動系動作から操作系へと動作の系統が変化していることを示した²⁵⁾。張ら(2004)は、園庭の広場と園庭に設置されている遊具で遊ぶ子どもの行動を調査した結果、広場での遊び集団が大きく、遊び時間が長いことから、広場の設置の有用性を示した。また、固定遊具の種類は同様でも、配置の仕方では子どもの遊びの量や質が異なり、L字型の配置が、子どもの豊かな遊びを保障するのに有効であることを示した²⁶⁾。内野(2019)は、斜面、階段、樹木等の様々な特性をもつ築山に着目して子どもを観察することと、卒園生に園生活を振り返りながら問うことで、幼児の築山との関わりから得られる教育的効果を検討した。その結果、築山を巡る幼児の関わりによる変化、自然環境の変化、変化のある地形の3つの要素が融合して、子どもに印象づき、教育的効果が見出されることを示した²⁷⁾。

屋外環境に焦点を当てた研究では、砂場に着目した研究は数多く蓄積されている。例えば、箕輪(2006)²⁸⁾、石井(1990)³²⁾、石倉(2012)³³⁾、笠間(2006)³⁴⁾、粕谷(2007)³⁵⁾等、幼児が砂場に身を置き、砂に関わることで、豊かな遊びの誘発や幼児の諸側面の発達を促すことが示されている。砂場は、他とは異なる特性を持ち合わせている。第一に、砂場は、通常、園庭の中央に設置されることはなく、園庭の角やへりに設置されているという空間的環境の特性があるため幼児が滞留しやすく、場を見立ててイメージを膨らませたり、遊び仲間と安定して関わったりすることが容易である。第二に、砂の可塑性を生かした遊びの広がりが見られることである。砂は、水と混ぜる、固める、容器に入れる等、幼児自らの動作により形が変化し、楽しさを誘い、イメージ作りに寄与しやすい。また、日常的にほぼ砂の使用量に制限が加わることないため、砂の所有をめぐるいざごは起こりにくい。このような特徴を捉えながら、砂場を巡る場・物・人との相互作用を多様な視点で研究されている。

2. 屋外環境との関与に関する海外の研究

海外の研究にも、幼児の屋外環境との関与の有用性を示す研究が見られる。例えば、低所得層の子どもの認知スキルと社会情動的スキル²¹⁾や、実行機能³⁶⁾が身近な自然環境との関わりによって強化される可能性があることを示唆し、屋外での遊びと適応機能との関連性が示されている(Hinds & Sparks, 2011)³⁷⁾。このように、屋外の自然環境との関わりを子どもの発達面から分析している研究の他、自然環境との関わりが子どものストレスを和らげるものの有用性も示されている。例えば、自然環境の中で自然物に触れることは、特定の感覚が作用して幼児のストレスが緩和されること(Louv, 2005)³⁸⁾や、高所得層の子どもの心理的な幸福と一貫した正の相関が見られることを明らかにしている(Hattie, Marsh, Neill, & Richards, 1997)³⁹⁾。

また、屋外環境の関与と子どもの行動特性との関連を分析した研究も挙げられる。例えば、子どもの自然環境の関わりを量的な差を分析した研究⁴⁰⁾や、自然環境との関与により、中程度以上の激しい身体活動の量が著しく増加することを示す研究⁴¹⁾がある。しかし、Spurrierら(2008)の研究の「幼児の遊びのレベルが園庭の大きさに反映している」との知見⁴⁰⁾を参照しながら、「自然物を活用した遊びの利点を調査した研究はほとんどない」との指摘がある(Hinds & Sparks, 2011)³⁷⁾。

3. 屋内環境に焦点を当てた研究

幼稚園施設整備指針の改定に伴い発行された「これからの幼稚園施設のあり方について—幼児教育の場にふさわしい豊かな環境づくりを目指して—」では、屋内環境整備として、環境を通して行う教育の実現のために、絵本コーナーなど様々なコーナーの設定や家具の配置を工夫すること、弾力的で変化のある空間を計画することを推奨されている⁴²⁾。

山田ら(2009)は、3, 4, 5歳児を対象に、自由遊びの時間に園内の14種のコーナーで遊ぶ子どもの様子から、コーナー遊びの人数規模は6名までが大半であり、量2量分の一回り小さいくらいの面積があれば十分であるが、子どものコーナーの活用方法を捉えると、特定の遊びと結びつきやすいコーナー(プラレール、レゴブロック、積み木、ごっこ遊び、お絵かき、粘土)と結びつきにくいコーナーがあることを示唆した⁴³⁾。また、白石ら(2009)は、コーナー保育を実施する園の子どもを対象に、各コーナーの意味や価値を調査した。その結果、5歳児は、自分自身で自由に遊びの内容を選択できる製作、ごっこ遊び、外遊びのコーナーを選択し、4歳児は、初期の段階で多くの空間に興味を示すが、やがて同じ空間で経験を積むにつれて、明確な自分の意思を形成するようになったことが示された⁴⁴⁾。その他、保育室内の特定のコーナーに着目した研究として、製作コーナー⁴⁵⁾、絵本コーナー¹⁰⁾、つみきコーナー⁴⁶⁾、レゴコーナー¹²⁾の研究が見られる。これらの研究は、子どもの遊びの拠点となる各コーナーの物理的・空間的特徴と子どもの行動特性との関連を分析した研究であるが、結果からは、遊びの種類や年齢によって、コーナーに滞留する様態が異なることが示唆されている。しかし、多田(2015)は、コーナーの空間的特性の「囲われ度」のみならず、その場に滞留する子どもの「感じられる広さ」について言及している⁴⁶⁾。

一方で、コーナーのみならず、コーナー以外の空間との関連性を示唆する研究もある。例えば、屋内に設置された各コーナーは、ある程度の広さのある空間を仕切るため、子どもが滞留しやすく、遊びの拠点となりやすいが、中川(2015)は、1歳児保育室の仕切られた空間での子どもの行動特性を「単一の広い空間」での行動特性との関連から分析した。その結果、子どもは、仕切られた空間での他児の様子を見てその空間の使い方を知り、遊びを広げ、子どもの発達を支える重要な空間ではあるが、「単一の広い空間」が確保されていることで、新たな遊びが広がることを示唆している⁴⁷⁾。「屋内空間をどのように仕切り、コーナーを作るのか」を探ると共に、子どもの行動特性をコーナーとそれ以外の空間との関連から捉えることも重要である。同様に、子どものいる空間的環境を滞留する特定の場のみならず、他の場とのつながりから子どもの行動特性を捉えることの重要性は、無藤(2012)⁴⁸⁾及び中田(2019)²⁹⁾も指摘している。

4. 半屋外に焦点を当てた研究

園環境の中の半屋外の空間として、幼稚園施設整備指針では、「バルコニー、テラス、庇の下等、保育室等の内部空間と密接に関係した屋外空間」と説明している。幼稚園施設整備指針第1章総則に記載される「幼稚園施設整備の課題への対応」には、屋内外の空間利用の連続性や回遊性に配慮することや半屋外空間の充実を推奨している。

半屋外に焦点を当てた研究を概観すると、外遊びの活性化⁴⁹⁾、取り組む遊びの選択⁵⁰⁾、各遊びの連携や参加人数の変動等の状況に応じた可変性⁵¹⁾において、有用であることを示す研究が挙げられる。境(2015)⁵²⁾は、テラスという半屋外の「境の場所」で遊ぶ子どもの観察記録をM-GTAにより分析したところ、4つの特質と8つの機能が見出されたが、研究対象とした4園のテラスの設計上の特徴を踏まえて比較したところ、テラス自体の奥行きやそこでの遊びのルールよりも、むしろその周囲の場所または施設全体の大きさやルールと関連していることを示唆した。

このように、半屋外の空間は様々な機能を有していることから、他の空間をも俯瞰して、子どもの空間的環境との関与を捉えて積極的に保育に活用することは有効であると考えられる。

5. 園環境全体の構造に焦点を当てた研究

園全体を見通して、その全体的な構造上の特性に着目した研究も散見される。仙田(2016)は、子どもが遊びたくなる園全体の構造として「遊環構造」を提唱した⁵³⁾。遊環構造とは、安全で変化に富み、めまいを体験できる循環機能があること、その循環に広場が取り付けられ、全体がポーラス(多孔質)な空間で構成されていることと説明しており、この仙田の提唱する遊環構造に触れながら分析・考察された研究が散見される^{4, 5)}。これらは、いずれも平面状の遊環構造について言及しているが、稲葉ら(2014)⁵⁴⁾は、「断面的に保育空間を検討すること自体があまりなされていない。」と指摘し、ロフトや中二階を有する空間の断面的な遊環構造を持つ園環境とそこでの幼児の行動特性を調査した。その結果、交流の起こる範囲は、高さ1400mm、幅1200mmの範囲であり、平面とは異なる見渡しという形での交流が存在することを示した。

その他、幼児の遊びの移り変わる際の空間的特性を分析した研究⁵⁵⁾、子ども自身の遊び場の選択や場の見立て等の多様な遊びを誘発する空間的特性を分析した研究⁵⁶⁾、保育活動の形態と時間的変化と空間的特性を調査した研究⁵⁷⁾がある。

さらに、園の保育方針や保育形態に対応した園環境全体の建築計画についての調査研究も見られる。例えば、異年齢保育と空間構成⁵⁸⁾、主体的な自然とのふれあい⁵⁹⁾、幼稚園の認定こども園化に伴う改装⁶⁰⁾、0, 1, 2歳児の異年齢交流⁷⁾である。

これらを整理、検討すると、園の全体的構造と幼児の行動特性のうち、滞留・回遊行動の両面の特性を関連させながら分析している研究が中心である。

以上のように、国内の研究が、園環境の限られた面積の空間に、仕切りをしたり、連続性を持たせたりして、幼児の滞留・回遊する姿を調査し、「どのような空間的な特性が子どもの遊びの充実を促すのか」という視点で研究されていることが中心であるのに対し、海外の研究を概観すると、空間の面積に対する子どもの人数の多さ(chaos)に着目した研究が多い。

Bronfenbrennerは、子どもの年齢が上がるにつれて、他児や大人との関わりが徐々に複雑になることから、予測不可能で構造化されていない環境は、子どもの発達を不安定にする可能性があることを示唆した(Bronfenbrenner & Evans, 2000. Bronfenbrenner & Morris, 1998)^{61, 62)}。また、この示唆が影響して、chaosと子どもの発達への関心が高まったことを示している^{63, 64)}(Evans & Wachs, 2010; Fiese, 2006)。さらに、chaosが幼児の認知および社会的感情の発達に重要となる遊びを中断する一つの要因であるため、子どもに負の効果をもたらすことを示した(Bartlett, 1999; Milteer et al., 2012)^{65, 66)}。

また、子どもの遊び環境の中にある、数学的要素^{67, 68)}や危険性⁶⁹⁾といった特定の要素への保育者の着眼と子どもの経験内容を分析した研究が散見された。国内の研究が、子どもが遊びを通して環境と関わる姿を捉えようとするのが中心であるのに対して、これらの海外の研究は、保育者の幼児を取り巻く環境の捉え方の差による子どもの経験内容の差に着目している。

3-3 幼児の視座から捉えた空間的環境との関係性

ここでは、「幼児が空間的環境にどのように関わるのか」という問いを分析した研究を整理する。

ボルノウ(O. F. Bollnow)は、人間がその空間に「住まう(そこに根を下ろし、くつろぎ、安心して)」ことによって生まれる空間を「行動空間」とし、人間が何らかの意味ある行為をしながら滞留している空間があることを説明している⁷⁰⁾。次に挙げる研究はいずれも、ボルノウのいう「行動空間」に着目した研究である。

1. 幼児にとっての場の意味や機能を分析したもの

幼児の場の関わりから、幼児にとってどのような意味や機能があるのかを明らかにした研究について

整理する。無藤（2012）は、エドワード・レルフ（Edward Relph）の「場所の現象学」^{註5)}を引用しながら、「場所とは人のあり方の根本と結びつくものである。子どもの成長が十全のものとなるには、子どもにとって場所が成り立たねばならない。子どもにとっての意味が実現しなければならない。」と述べている⁷¹⁾。では、子どもは、場にどのように「住まう」ことで「行動空間」になり得、「場所」が成り立つのであろうか。このような点に着目した研究を概観する。

砂上ら（2002）は、幼児が、他者の作った場に入る前に、場の使い方を教えあう場面を抽出し、その具体的な事例の分析と論証を行った。その結果、子どもが作った場の使い方を他児と教えあうことは、遊びの仲間入りの承認や働きかけとして機能し、他児と場を共有することは、場の使い方を共有することであるが、場の使い方は予め固定されておらず、具体的な身体の動きとして共有され、場を共有するという契機により遊びの進行のなかで生成されることを示した⁷²⁾。また、高櫻（2013）は、3歳児が一人遊びから仲間との遊びへと移行する過程に焦点を当て、自分の存在する空間（この研究では、空間の一部を切り取ったものを「場」と表し、より広義な検討の対象とする場合には「空間」と表している）と他児が存在する空間の意味するところが6種認められ、空間との親密性を基盤にして幼児自らが主体となって他児との相互作用が交われ、身体の同時性と共同化、遊びへの志向性の一致と集約に基づいて空間が共有されることを見出した⁷³⁾。このように、場を共有することの意味や機能について多様な面から有用性や可変性が示唆されている。

また、高嶋（2003）も、幼児と三輪車を巡る事例から、幼児の場の意味づけの可変性を捉えている。幼児が三輪車という活動媒体によって意味づけられる活動が、その時々幼児の必然性に即して多様に変化していく様子を捉え、三輪車置き場という「空間」とそこにある資源（三輪車）を自分にとっての環境として、自分の活動に必要な文脈をその都度的に創出し、意味づけていくことのできる「場」を構成していることを示した⁷⁴⁾。

その他、保育者の捉えた遊び場としての機能を調査した研究⁷⁵⁾、通園バス車内を園生活と家庭生活の「境の場所」としての機能として捉えた研究⁷⁶⁾、園環境の閉所に焦点を当てて子どもにとっての機能を分析した研究²⁹⁾が挙げられる。

一方で、成人を対象として幼児期の体験を思い出しながら場の意味を捉えようとする研究もある。仙田（1982）⁷⁷⁾は、これを「あそびの原風景」と呼び、調査結果から幼児の場の意味について分析しており、この手法を追従した研究も散見される^{78, 79)}。

2. 他児の関わりと空間的環境

子どもが他児と関わりながら遊ぶ場面を捉えて、空間的環境との関連を分析した研究を挙げる。佐藤（2004）は、子どもが関わりあいながら遊ぶまとまりを「遊び集合」と称し、遊びが移行するプロセスを観察した。幼児の視覚的、聴覚的關係が遊び集合を結び付けて拡張させるが、時に、視覚的關係（子どもが相手を視認できるか否か）にかかわらず、關係を持続しながら遊びが移行していることを示した。さらに、遊び集合は、人や空間といった、環境要素を選択することで形成され、やがて遊び集合自体が環境要素となりさらなる遊び集合が発生していることを示唆した⁸⁰⁾。また、廣瀬（2007）は、3, 5歳児を対象として、屋内・屋外の共有スペース、平地、机や固定遊具のある付近で遊ぶ様子を分析した。その結果、3歳児の方が他児と関わる上で物的環境の影響を受けやすいことを示した⁸¹⁾。

これらの研究は、空間的環境の幼児同士の關係構築へ与える影響は、子どもの年齢や遊びの移行のプロセスにより、その度合いに差があること、子ども同士の關係自体も子どもにとっての環境要素となり得ることを示すものである。

3. 幼児の捉える空間的環境

これまで示した研究は、いずれも、研究者が幼児や幼児を取り巻く環境を観察して得られたデータを分析したものであるが、幼児に直接問う手法を用いた研究^{82,83)}も見られる。

宮本ら(2015)は、幼児自身にカメラを持たせて撮影する「写真投影法」と幼児を対象としたインタビュー法を用いて分析したところ、幼児はその場での経験を通して独自の意味を場に付与することで「潜在的に持つ場の意味や構造に多様な広がりをもたらし得る」こと、「過去の経験をもとに場と行為を振り返り解釈し直す」ことを示唆した⁸²⁾。その他、描画から幼児の空間把握を捉えた研究^{83,84)}もあるが、数としては少ない。幼児にも可能な手段で、幼児から見た環境の捉えを研究する余地は十分にあると考える。

4. 考察

本稿で分析対象とした文献は、物理的な環境が幼児の行動や知覚に何らかの影響を与えることが前提で「環境を通じた教育」¹⁾の重要性を踏まえたものであると解釈できるものであった。また、保育・幼児教育、環境教育、建築学等、様々な分野にわたっていることが特徴的である。

保育にある、人と環境の複雑で多様な構造や可変性のあるその関係性に着目した研究は、何を手がかりに、また何に焦点を当てて、どのような切り口で分析するのが大きな課題となる。本稿で整理した先行研究からは、今後の課題が3点見出せた。

第一に、先述した3-1の整理から、環境構成の変化が子どもの行動に変化をもたらし、保育の質向上に寄与することを目的とした場合、一時的な保育場面のみを捉えた研究では不十分であり、子どもの姿と環境構成の変化、そして保育者の行動を連続的に捉えた分析が必要である。それと共に、保育の質向上を目的とした場合、空間的環境と子どもの姿を、その関連性を踏まえて連続的に捉えることとその連続性を評価するための指標作成が必要であると考えられる。

第二に、3-2の整理から、空間的環境の特性を踏まえた子どもの滞留行動を捉えることが有用であると考えられる。なぜならば、園内には様々な特性や用途のある場が設置されている中で、子どもたちがどのような場に滞留するのかを調査・分析することは、子どもの興味や行動特性、空間に内在する意味を捉えることに近づくことができるのではないからである。しかしながら、ここに示した先行研究は、山本(2019)によって指摘されている。すなわち、環境を子どもの特定の行動や発達を促す手段として捉える暗黙の前提をとる研究が中心であるということである。山本(2019)は、「環境を保育者の操作可能な対象として指定し、観察されたデータの客観性に基づいて研究の公共性を確保しようとするパラダイムは、環境の一側面を捉えたものにすぎない」と主張している。「環境が偶発性を伴い、想定を超えて出会われるものであるという視点」をもって、保育者にとっての有用性を「理論化を試みる課題が十分に手をつけられていない」と指摘している⁸⁵⁾。この指摘を踏まえて、子どもの空間的環境との関与に関する新たな視点と保育環境の有用性の理論化を試みることが求められる。

第三に、3-3の整理から、子どもの視点から空間を捉えることを通じて空間の意味や意味化のプロセスを探ることで、子どもの空間的環境との関与に関する新たな視点を見出す可能性が期待できる。

引用文献

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」2017
- 2) 汐見稔幸「子どもの生活時間・空間の諸相」保育学研究第46巻第1号 p.32-42. 2008年
- 3) 山本一成「保育実践へのエコロジカル・アプローチ アフォーダンス理論で世界と出会う」九州大学出版会 p.1-7. 2019年
- 4) 河邊貴子「園庭環境の再構築による幼児の遊びの新しい展開—ウッドデッキの新設をめぐって—」保育学研究第44巻第2号 p.139-149. 2006年

- 5) 河邊貴子「環境の改善は、幼児の遊びの展開にどのように変化をもたらすか～遊びの充実を目指したアクションリサーチ第2報～」立教女学院短期大学紀要 36 巻 p. 9-24 2004 年
- 6) 村上博文、松永静子、保坂佳一、富山大士、汐見稔幸、志村洋子「乳児保育室の環境変成と子どもの行動の変化—対象児における遊びの質的变化に着目して—」こども環境学研究第4巻第1号 p.110. 2008 年
- 7) 佐藤将之、柿沼平太郎「認定こども園における0,1,2歳児を対象とした共有空間に関する考察」こども環境学会第9巻第1号 p.122. 2013 年
- 8) 中村知嗣、石田敦也、藤田清隆、本田由衣、松延毅、松延摩也子、香曾我部琢「2歳児保育室の環境構成の変化と保育者の役割の変容Ⅲ:SCATを用いた混合研究法による一考察」宮城教育大学情報処理センター研究紀要第23号, p.15-20, 2016 年
- 9) 村上博文「乳児保育室の空間変成と“子ども及び保育者”の変化」東京大学大学院教育学研究科紀要第49巻 p.21-31. 2009 年
- 10) 山田恵美「保育における空間構成と活動の発展的相互対応—アクションリサーチによる絵本コーナーの検討—」保育学研究第49巻第3号 p. 260-268, 2011 年
- 11) 麻生沙希、佐藤将之「保育園における環境設定変更を通じた保育者意識や環境の時間的移行」こども環境学会第10巻第1号 p.94. 2014 年
- 12) 清水陽子、犬童れい子「5歳児の規範意識を育てる保育環境の考察—レゴコーナーにおけるさまりの習得過程を中心に—」九州女子大学紀要第52巻2号, p.145-155, 2016 年
- 13) 増田まゆみ、齊藤多江子「子どもの遊び環境に関する研究—1歳児クラスにおける保育室の空間構成のあり方に関する研究—遊び場面における子どもの「とどまる」行動に着目して—」東京家政大学博物館紀要第22集 p.63-75. 2017
- 14) 松延毅、中村知嗣、藤田清澄、本田由衣、石田淳也、松延摩也子、香曾我部琢「2歳児保育室の環境構成の変化と保育者の役割の変容Ⅰ」宮城教育大学情報処理センター研究紀要第23号, p.3-8 2016 年
- 15) 中村知嗣、石田淳也、藤田清澄、本田由衣、松延毅、松延摩也子、香曾我部琢「2歳児保育室の環境構成の変化と保育者の役割の変容Ⅱ相互行為分析による保育者の援助の変容についての一考察」宮城教育大学情報処理センター研究紀要第23号, p.9-14. 2016 年
- 16) 西本雅人、今井正次、木下誠一「保育プログラムに伴うコーナー設定の一年間の変化 保育者による空間設定からみる保育室計画に関する研究」日本建築学会計画系論文集第601号 p.47-55. 2006 年
- 17) 吉田祥子、森傑、奥俊信「先生—園児関係から見た遊びと場の創造に関する研究—札幌市の市立幼稚園をケース・スタディーとして—」こども環境学研究.1 (2), p.106-111. 2005 年
- 18) Teresa K Aslanian “Ready or not, here they come! Care as a material and organizational practice in ECEC for children under two” *Global Studies of Childhood*, vol. 7, 4: pp. 323-334. , First Published December 22, 2017.
- 19) Kim T. Ferguson¹, Rochelle C. Cassells, Jack W. MacAllister¹, and Gary W. Evans” The physical environment and child development: An international review” *International Journal of Psychology*, p.1-32. 2013
- 20) Aboud, F. E. “Evaluation of an early childhood preschool program in rural Bangladesh”. *Early Childhood Research Quarterly*, 21, p.46–60. 2006.
- 21) Moore, A. C., Akhter, S., & Aboud, F. E.” Evaluating an improved quality preschool program in rural Bangladesh”. *International Journal of Educational Development*, 28 (2), p.118-131. 2008.
- 22) 石倉卓子、香曾我部琢、竹田好美、中田範子「認定こども園の園庭における幼児の豊かな経験に関する保育者の援助—自由記述のテキスト・マイニングによる分析より—」宮城教育大学情報処理センター紀要第27号 印刷中 (in press) 2020 年
- 23) Matthew Manning, Gabriel T. W. Wong, Christopher M. Fleming, Susanne Garvis “Is Teacher Qualification Associated With the Quality of the Early Childhood Education and Care Environment? A Meta-Analytic Review”

- Review of Educational Research, vol. 89, 3: p. 370-415. 2019.
- 24) 文部科学省「幼稚園施設整備指針」2018年
 - 25) 千田卓弥、柳瀬亮太「園庭の環境要素と遊び行動に関する実態分析—横浜市港北区における幼稚園を事例として—」こども環境学研究第15巻第1号 p.49. 2019年
 - 26) 張嬉卿、仙田満、大野隆造、仲綾子「園庭におけるあそび行動よりみた遊具・広場計画に関する研究」ランドスケープ研究 67 (5). p.429-432. 2004年
 - 27) 内野彰裕「園庭における幼児の自然体験に関する実践的研究」こども環境学研究第15巻第3号 p.83-90. 2019年
 - 28) 箕輪潤子「幼児同士の砂遊びの特徴—ガーヴェイのごっこ遊び理論を手がかりとして—」保育学研究第44巻第2号 p.82-92. 2006年
 - 29) 中田範子「保育現場における閉所の子どものための意味」保育学研究第57巻第2号, p. 222-231, 2019年
 - 30) 仙田考「園庭環境における「道スペース」の展開と可能性」こども環境学研究第15巻第1号 p.54. 2019年
 - 31) 一般社団法人園 power「屋上園庭の可能性—都心型保育所の事例調査を通して—」こども環境学研究第15巻第1号 p.55. 2019年
 - 32) 石井光恵「幼稚園における砂遊びに関する一考察」日本女子大学紀要家政学部第37巻 p.17-22. 1990年
 - 33) 石倉卓子「幼児期にふさわしい園庭環境の検討—物質としての自然材の視点と表現行為—」富山国際大学子ども育成学部紀要第3巻 p.1-15. 2012年
 - 34) 笠間浩幸「子どもの遊び環境としてのく砂場—砂遊びから見る子どもの発達とく砂場—の役割」環境教育研究第1巻第1号 p. 113-124. 1998年
 - 35) 粕谷亘正「砂にかかわる幼児の遊びの構造とその理解」保育学研究第45巻1号 p. 34-41 2007年
 - 36) Evans, G. W. "Child development and the physical environment". Annual Review of Psychology, 57, p.423-451. 2006
 - 37) Hinds, J., & Sparks P. "The affective quality of human-natural environment relationships". Evolutionary Psychology, 9, p.451-469 2011
 - 38) Louv, R. "Last child in the woods: Saving our children from nature-deficit disorder". New York, NY: Algonquin Books of Chapel Hill. 2005
 - 39) Hattie, J., Marsh, H. W., Neill, J., & Richards, G. "Adventure education and outward bound. Review of Educational Research", 67, p.43-87. 1997
 - 40) Spurrier, N., Magarey, A., Golley, R., Curnow, F., & Sawyer, M. "Relationships between the home environment and physical activity and dietary patterns of preschool children: A cross-sectional study". International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity, 2008
 - 41) Rosenberg, D., Sallis, J., Kerr, J., Maher, J., Norman, G., Durant, N., Saelens, B. "Brief scales to assess physical activity and sedentary equipment in the home". International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity, 7, 10. 2010
 - 42) 学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議「これからの幼稚園施設のあり方について—幼児教育の場にふさわしい豊かな環境づくりを目指して—」2018年
 - 43) 山田恵美、佐藤将之、山田あすか「自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究」日本建築学会計画系論文集 第637号 p.549-557. 2009年
 - 44) 白石雄貴、佐藤将之、若盛正城、佐野友紀「保育者と幼児からみたコーナー保育環境の評価に関する研究」こども環境学会第5巻第1号 p.63 2009年
 - 45) 石川徹「保育室における製作コーナーの意義について—自由遊びの中での製作コーナーの活用に視点を置いて—」こども環境学研究第15巻, 第1号 p.70. 2019年
 - 46) 多田幸子「幼児による遊び場の環境構成に関する研究」山梨県立大学人間福祉学部紀要 vol.10 p.41-50. 2015年
 - 47) 中川愛「1歳児低月齢クラスの室内遊びに関する研究—仕切られた空間での遊びに着目して—」奈良教育大学次世

代教員養成センター研究紀要 p.227-234. 2015 年

- 48) 無藤隆「保育実践と保育環境（総説）」保育学研究第 50 巻第 3 号 p.4-7. 2012 年
- 49) 高木真人、朝妻秀雄「子どもの外遊びを活性化させる空間としての縁側の可能性」こども環境学研究第 6 巻第 1 号 . P.106.2010 年
- 50) 松延毅、石田淳也、本田由衣、杉本翔平、中田範子、伊藤恵里子「遊びの世界における廊下の意味—モザイクアプローチで解釈する“手を繋いでさまよう女兒たち”の物語—」日本保育学会第 72 回大会 2019 年
- 51) 藤田大輔「保育園にける 1, 2 歳児の遊びスペースのあり方に関する考察 デッキと保育室がゆるやかにつながった園におけるケーススタディ」こども環境学会第 11 巻第 1 号 p.73. 2015 年
- 52) 境愛一郎「保育環境における『境の場所』の機能と特質」中国四国教育学会教育学研究ジャーナル第 17 号 , p.11-20, 2015 年
- 53) 仙田満「こどもの庭」p.184-186 世界文化社 2016 年
- 54) 稲葉直樹、佐藤将之「保育施設における幼児の交流と断面的距離に関する考察」建築学会大会講演梗概集 p.357-358. 2014 年
- 55) 岩田秀斗、藤田大輔「保育所・幼稚園における遊び行為の展開に関わる空間的特性」こども環境学研究第 5 巻第 1 号 p.76 2009 年
- 56) 早川亜希、橋本雅好、柄澤菜月「子どもの遊び場所と遊び方に影響を与える物理的要素の考察—sh 保育所における保育室と多目的室を対象に—」こども環境学研究第 15 巻 , 第 3 号 p.70-83. 2019 年
- 57) 藤田大輔、山崎俊和「幼稚園各室・空間における保育活動の時間的特性について」日本建築学会計画系論文集第 99 号 p.203-208. 2003 年
- 58) 岩田卓也、藤田大輔「異年齢保育を導入した保育園の有効な点と課題点」こども環境学会第 8 巻第 1 号 p.54. 2012 年
- 59) 井上明日香、岩本泰、仙田考、室田憲一「園庭における主体的な自然ふれあいの場へのかかわりを考える～認定こども園四街道さつき幼稚園での四季毎の調査から～」こども環境学研究第 14 巻 , 第 1 号 p.52. 2018 年
- 60) 浅井淳、仙田考、中川由美子、西山俊太郎「認定こども園峯岡幼稚園の園舎・園庭環境の創生—園舎全面改装と幼稚園の認定こども園化に伴う段階的整備手法」こども環境学研究第 14 巻 , 第 1 号 p.51. 2018 年
- 61) Bronfenbrenner, U., & Evans, G. W. "Developmental science in the 21st century: Emerging theoretical models, research designs, and empirical findings". *Social Development*, 9, p.115-125. 2000.
- 62) Bronfenbrenner, U., & Morris, P. A. "The ecology of developmental processes". In W. Damon & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of child psychology: Vol. 1. Theoretical models of human development*. p. 993-1028. 1998.
- 63) Evans, G. W., Wells, N. M., & Schamberg, M. A. "The role of the environment in SES and obesity". In L. Dube, et al., (Eds.) , *Obesity prevention: The role of society and brain on individual behavior* .p.713-725. 2010.
- 64) Fiese, B. H." *Family routines and rituals*". Yale University Press. 2006
- 65) Bartlett, S. "Children's experience of the physical environment in poor urban settlements and the implications for policy, planning and practice". *Environment & Urbanization*, 11, 63-73. 1999
- 66) Milteer, R. M., Ginsburg, K. R., Mulligan, D. A., Ameenuddin, N., Brown, A., Christakis, D. A., et al., "The importance of play in promoting healthy child development and maintaining strong parent-child bond: Focus on children in poverty". *Pediatrics*, 129 (1) , p.204-213. 2012.
- 67) Caroline Cohrssen, Amelia Church, Karin Ishimine, Collette Tayler "Playing with Maths: Facilitating the Learning in Play-Based Learning" *Australasian Journal of Early Childhood*, vol. 38, 1: pp. 95-99. 2013.
- 68) Caroline Cohrssen, Amelia Church, Collette Tayler "Play-Based Mathematics Activities as a Resource for Changing Educator Attitudes and Practice" vol. 6, 2, 2016.
- 69) Rasmus Kleppe "Affordances for 1- to 3-year-olds' risky play in Early Childhood Education and Care" *Journal of*

Early Childhood Research, vol. 16, 3: pp. 258-275. 2018.

- 70) ボルノウ「人間と空間」せりか書房 p.195. 1978年
- 71) 無藤隆「トボスにおける発達第1回」幼児の教育 94 (4), 24-31, 1995年
- 72) 砂上史子、無藤隆「幼児の遊びにおける場の共有と身体の動き」保育学研究第40巻第1号, 64-74. 2002年
- 73) 高櫻綾子「遊びの中で生起する空間と親密性との関連についての検討——一人遊びから仲間との遊びへの移行過程に着目して」乳幼児教育学研究第22号 p.111-121, 2013年
- 74) 高嶋景子「子どもの育ちを支える保育の「場」の在りように関する一考察—スタンスの構成としての「参加」過程の関係論的分析を通して—」保育学研究第41巻第1号 p.46-53. 2003年
- 75) 宮本雄太、秋田喜代美、辻谷真知子、宮田まり子、石田佳織「子どもの活動から捉える遊び場の機能の探究：保育に関与する者の役割・活動時間に着目して」こども環境学研究第15巻, 第1号 p.48. 2019年
- 76) 境愛一郎「通園バスに対する保育者の認識と保育環境としての可能性」保育学研究第56巻 第3号 p.92-102. 2018年
- 77) 仙田満「原風景によるあそび空間の特性に関する研究」日本建築学会論文報告集 第322号 p.108-117. 1982年
- 78) 川原一憲、荻野穂高、仙田満、国広ジョージ「原風景としての樹木が持つ力と空間性に関する研究：想起された樹木の様態を通して（子供の遊び空間、環境工学Ⅰ）日本建築学会学術講演梗概集, p.31-32, 2007年
- 79) 仙田満、矢田努、浅野耕一、本田哲也「現代日本の創作児童文学におけるあそび空間の研究」日本建築学会計画系論文集 63 (510) p.177-183. 1998年
- 80) 佐藤将之、西出和彦、高橋鷹志「遊び集合の移行からみた園児と環境についての考察—園児の社会性獲得と空間の相互関係に関する研究 その2—」日本建築学会計画系論文集第575号 p.29-35. 2004年
- 81) 廣瀬聡弥「幼稚園の屋内と屋外における様々な遊び場所が仲間との関わりに及ぼす影響」保育学研究第45巻第1号 p.54-63. 2007年
- 82) 宮本雄太、秋田喜代美、辻谷真知子、宮田まり子「幼児の遊びの場の認識：幼児による写真投影法を用いて」乳幼児教育学研究第25号, p.9-21, 2016年
- 83) 佐藤香織、濱崎玲、佐藤将之、中谷純、林正人、大竹正裕、長谷川恵美「保育施設における描画や意識からみた幼児の空間把握に関する考察」日本建築学会学術講演梗概集, p.285-286, 2013年
- 84) 佐藤将之、山岡史織「描画と写真投影からみた保育園における幼児の環境把握に関する研究」こども環境学研究第10巻第1号 p.92. 2014年
- 85) 前掲書 3, p.67-79

注

- 注1) 「生きられる空間」とは、精神医学者E・ミンコフスキー、現象学の見地からメルロ＝ポンティ、ハイデカー、ボルノウ等、様々な分野で取り上げられ研究されている。意味としては、単に外部から観察される構造物や背景ではなく、人間の持つ象徴能力を介在させ、空間を感じとる経験の積み重ねによって成立される知覚空間であり、「私たちがそこで生きているところの空間」と説明されている。
- 注2) レヴィンの提唱する「場の理論」は、「社会科学における場の理論」（猪股佐登留翻訳、誠信書房）等で広く紹介されている。
- 注3) ギブソンの提唱するアフォーダンス理論は、「生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る」（古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻翻訳、サイエンス社）等で広く知られている。
- 注4) ECERS-Rは、「保育環境評価スケール」（埋橋玲子翻訳 法律文化社）として、日本でも出版されている。「乳児版」と「幼児版」の他、「考える力版」「放課後児童クラブ版」が出版されている。
- 注5) 「場所の現象学」（高野岳彦、阿部隆、石山美也子翻訳 筑摩書房）として翻訳されている。

（受付 2020.3.25 受理 2020.6.30）